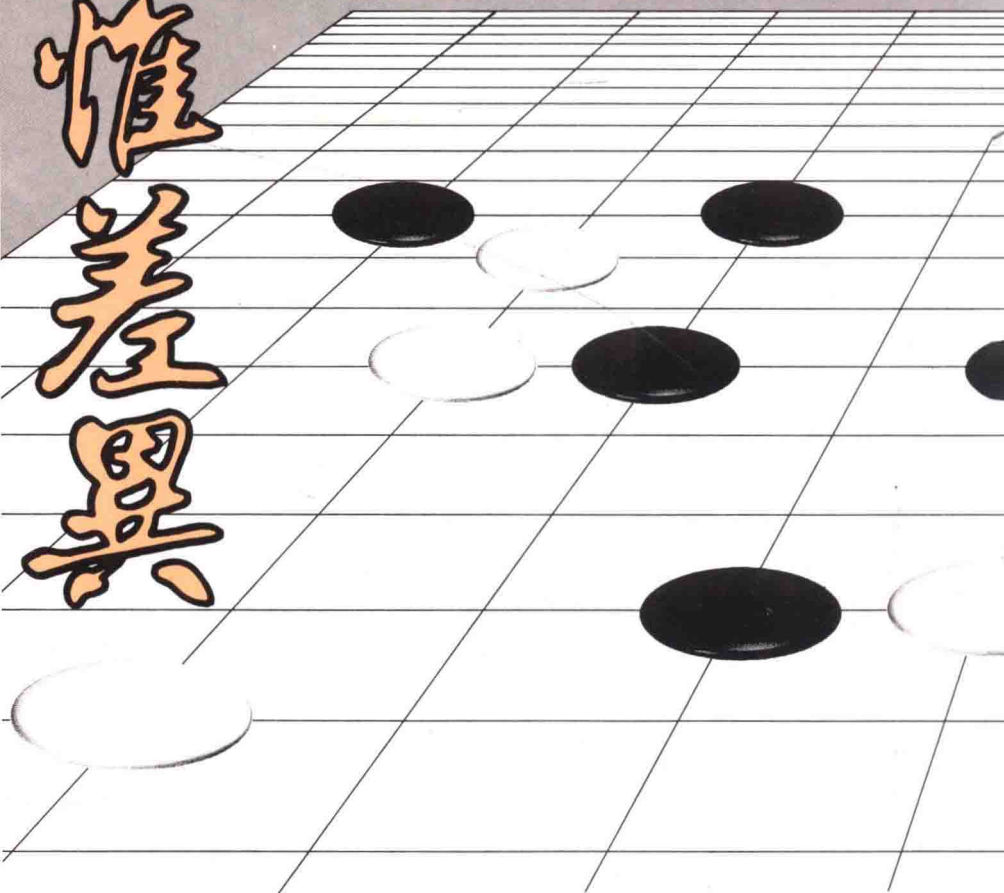
中日思惟差異

研討會論文集

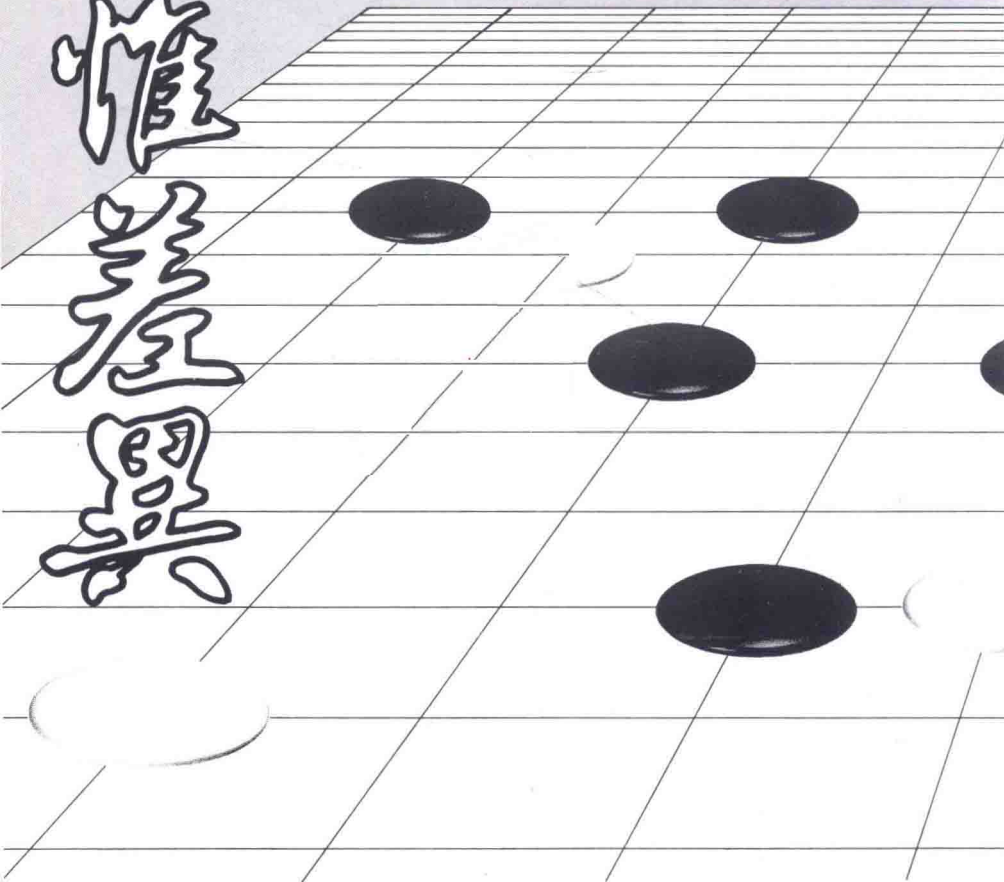
國立台灣大學日本綜合研究中心 編著



中日思惟差異

研討會論文集

國立台灣大學日本綜合研究中心 編著



中日思惟差異研討會論文集

中華民國八十三年五月一日　二版一刷
發 行 者　國立台灣大學日本綜合研究中心
主　　編　許介鱗
執行編輯　吳明上　張李曉娟　李中邦
出 版 者　國立台灣大學日本綜合研究中心
地　　址　台北市辛亥路三段三〇號337室
電　　話　(02)391-7257
傳　　眞　(02)363-3901
封面設計　東方廣告股份有限公司

ISBN 957-9019-45-2
1994, National Taiwan University Japan Research Center
Printed in Taiwan

李總統登輝先生和與會人士合影

△外交部午宴　錢　復部長致詞

△外交部午宴　鈴木治雄理事長致詞

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

△第一場會議　江丙坤部長、金森久雄教授、翁肇喜董事長、王源教授、竹內宏教授、許敏惠董事長、鈴木治雄理事長(由左至右)

△第二場會議　王紹慶顧問、林太龍總經理、田中健二理事長、林國煌教授、岡部達味教授、賴東明董事長、宮內淑子代表(由左至右)

△第三場會議　白鳥令會長、何既明常務理事、佐藤誠三郎所長代理、戴東雄院長、王月鏡參事、大中吉一理事長、許介圭局長(由左至右)

△第四場會議　飛岡健所長、張國安董事長、渡邊利夫教授、林文月教授、任耀廷董事長、伊藤憲一理事長、鄭世松總經理(由左至右)

△閉幕致詞　郭光雄代校長

△江丙坤部長接受各媒體訪問

△議場一景

△休息討論時間

アジア的思惟の差異から世界の新構圖を

実に、東洋と西洋では思惟方法はまったく違う。そして東洋においても、中国人と日本人の間では思考様式には大きな差異が存在するようだ。

西洋では個人主義的思想が発達しているといわれている。個人が身分や階級などの封建社会に組み込まれている中世的世界から、社会組織が解体して各人が契約によって結びつく、個人主義的対人関係が近代において成立し、これが「近代化」といわれた。思想史的に見ても、近代における自然法とか、社会契約説とか、功利主義などの根底をたぐると、個人主義的思惟が存在する。これは個人と社会の関係において、個人は社会よりも高い価値を付す存在と見なされて、個々人のそれぞれの自由と独立が重んじられるような思惟様式をなすからであろう。

しかしながら、西洋が産業革命を経て成立させたいわゆる近代文明は、実は科学技術のもたらした巨大な物質文明であった。この近代文明がもたらした生活の便利さはモダンな生活様式として世界各地に伝播され、そこでは物質文明のもつ普遍性がことさらに強調された。もし人間の技術的・物質的所産を文明と称し、人間の宗教・道徳・学問など内心的・精神的な生活態度を文化と言うならば、西洋と東洋の近代における文明の差

異から、今日にいたる文化の優劣が判定され、優位文化対下位文化、あるいは中心文化対周辺文化という、一元的な不平等文化観に転換されよう。そこで「近代化」とは、ある意味では特殊個別的な伝統文化から普遍的とされる西洋文明への移行の過程であった、ともいえるのである。

ところが、この二〇世紀後半のアジアに独自の技術文化が成立したことによって、西洋文明を中核として進展してきた「近代化」も、今や一つ神話となりつつある。戦後日本の経済発展と技術革新は、GNP一人当たりの世界的上位を記録し、また日本の飛躍にともなうアジアNIES、さらにはASEAN・中国の雁行追随によって、西洋文明の優越性は疑わしくなった。日本・NIESなどのアジア諸国は、自己文化をテコとして独自の技術文化を作りあげて、今や先進国に肩を並べようとしている。そこから、文化面での上位と下位の格差は、必ずしも物質文明の上下に従属する性質のものではない、という自信と反省が生まれてくるだろう。

一方、イスラム原理主義や宗教革命に象徴されるように、イスラム教の原点に立ち戻って自己文化の再生を図ろうとする努力もみられ、自己の文化的価値を肯定することによって、西洋文明の経済的効率を優先さす考え方に対する否定論も出てきた。それは、文化の経済に対する優位性の考えでもあり、積極的に独自の文化を主張して、西洋文化

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

の優越性を拒否することに連なっている。

また一方の西洋社会の内部においても、もろもろの宗教運動や環境保護運動が起こり、それが一種のアンチ資本主義文化の考えとして、カウンターカルチャー運動として展開されるようになってきた。貨幣経済がもたらした人間性の欠如という歪みを、宗教運動や環境の文化活動を通じて、なんとか人間性の回復に連ならせていきたいと主張しているのだ。ただ、宗教運動が完全な自己実現を目指すのに対して、環境保護運動は自然と人間との社会的な調和を求めているところに差異がある。

翻って、世界に跨がる先住民族を見てみよう。北極圏から南米大陸の南端までのさまざまな地域で生活している先住民族は、資本主義経済の周辺よりもさらに辺遠の地区にあって、伝統的な自給自足の小集団を営んできた。そして今やこうした先住民族問題が、人類生存の根本的在り方を問う課題として、深い関心の的になってきた。かつては、西洋型近代国家の形成過程において、植民・征服・侵略などの不当な手段と理論により、列強にむりやりに統合されまたは強制的な同化政策を受けることによって、ただ消滅の一途を辿るとされてきたいわゆる先住民族の存在の意義は、二十世紀の最後の時期になって、ようやく地球環境問題の深刻化との関連の中で見直されてきた。それは、自然環境と長年互恵共存してきた先住民族の知恵が再評価されてきたことと、現実には多くの

先住民族が新しい大規模な開発事業の犠牲に晒されている危機からくる、人類滅亡への反省に基づくものである。

こうして、西洋文化の先端を走る宗教的新自然主義者や環境保護運動者と、無資本文化の国際先住民の運動が合致する契機がもたらされた。いわば世界の最先端が最後尾を発見し、ここに人類史上、再度文化的意義をもって結合しようとしている。それはまた生命の尊厳というトータルなテーマの下で、自然、人間、社会、環境に纏わるもろもろの問題として提起され、再検討を迫る本体論のものでもある。

これまで、西洋のものは普遍文明と見なされ、非西洋的なものは個別劣等文化とされて、その対立と競合が、非西洋文化の衰退と西洋の普遍文化への吸収という図式で描かれてきた。ところが昨今での新しい多極化状況がもたらす多元的価値観の下では、文化の優劣論が影を潜めて、それぞれ独自の主張を輩出せしめてきた。

近代西洋文明は、西洋における二極の辺境に位置するアメリカとロシアでその極限に達し、アメリカ・プラグマティズムとロシア・マルクス主義という対照する普遍主義を主張してきた。この二つの西洋文明のもたらす対立と抗争の過程で、地球上の生命と資源は絶え間なく浪費され、全地球的規模での汚染が深刻化し、また物質的分配の不均衡のもたらす貧富の世界的拡大は、人間性の空洞化や自己喪失など精神の失調を引き起こ

した。西洋文明の普遍的価値への反省も、実はこうした地球上の生命の危機に怯える人間の叡知から生まれてきたのである。

ロシア・東欧の経済的破綻、アメリカの国際経済における地盤の低下、および西欧諸国の構造的不況は、西洋文明の袋小路を如実に物語っている。それはもう一面では、世界各地にさまざまな文化集団が勃興し、新しい自己認識の模索による主体性の意識の復活とともに、伝統による近代化の否定、西洋化の否定、特殊文化への肯定などとして現象化している。そして東洋の伝統には多様性が持合せられ、また今日新しい多様性が織りなすアジア文化には、新しい世紀のための文明の先驅者たる素地が存在する可能性が充分ある。

概して人類文明の誕生はアジアから始まり、地中海文明に伝わり、やがてこれがヨーロッパ文明を生み出し、それがまた大西洋を越えて今日のアメリカ文明となった。ところが、その文明の波はまた太平洋を東から西へと遷移して、再びアジアに巡り回り返ってきた。科学文明での原子力や宇宙開発、生命科学、医学などの進展は、宗教や倫理道徳との関わりで、人類の福祉向上に逆らう面での矛盾を随所に出現させてきている。そこで西洋の物質文明に対応するところで、アジアの仏教、儒教、神道などの精神文化の面が見直される所以がある。

ところで中国人と日本人の思惟の相違を探索して見ると、中国側は個人主義または利己主義的態度に傾きがちで、日本側は集団に共属しているとして共同体的な意義が発達しているともいわれている。

孫文はかつて大多数の中国人を「一皿の散砂」であると嘆いていた。個人主義や利己主義の意識で固められ、一皿の砂のように全くバラバラだからである。毛沢東は文化大革命を発動し、いわゆる「思想改造」によって中国人の個人主義または利己主義を克服しようとしたが悲劇的に失敗した。その後、文化大革命で批判を受けて失脚した鄧小平が復権して、中国人の実利主義的性格は移しがたいことを悟り、生活の豊かさこそ共産主義であるとして、「社会主義市場経済」とは名目ばかりの実質的には資本主義的政策の導入を図った。それによって中国経済は急速に発展してきたが、他面において指導幹部の腐敗、利己主義の復活、社会的倫理感の喪失など、中国のいわゆる社会主義体制にも「拝金主義」と「享楽主義」が蔓延してきた。台湾における「拝金主義」と「享楽主義」の跋扈は、言うまでもない。

中国人に比べて、日本民族の特徴は集団意識が特に発達している点にある、といわれている。社会の各階層において、日本人は誰が集団の内にいて、誰が外にいるのかを強く意識する。各々の集団は、「我々」と「彼ら」の間に一線を画し、それが人々の正し

い行動を規範する根本的な指針となる。集団メンバーの連帯性は緊密であり、お互いの行爲に対して集団的な責任感をもち、集団への忠誠と集団の要請に喜んで服従することが、日本社会における伝統的な美徳となっている。

しかし戦後、アメリカ式の個人主義や自由主義が導入されることによって、日本民族の集団意識は、個人的自由を認めない拘束的な社会関係もしくは社会集団を形成するものとして批判に晒されることになった。日本人の強い集団意識から生ずる副産物が、「自分」と「他人」に対する過剰意識である。そのために、「自分」があっても「他分」の意識がない。家族、仲間、組合、集合体などは、共同の目的を達成するために意識的に結合した集団であり、その集団以外の人々は「他人」であり、「仲間」に対極する存在となる。

この集団意識こそが、日本の国家主義の有力な源泉となったが、他方では、人と人との尊重、民族と民族との共存、果ては宇宙船地球号的な国際連帯につらなる思想も、不可欠であろう。地球は開発の永久機関車でもなければ、資源は無限大でもないのだ。人間は究極的には自然法則の制約を受けるから、人間と自然の共存も必要となる。そうでなければ、次の世代は生存の空間さえ我々に奪われてしまうではないか？

西洋の文明は、人間の欲望と資源の無限大という前提によって展開されてきた。これ

まで欧米の文化は人類史における文明進歩の先頭に立つものと見なされてきたが、その懐疑と反省がアジア的思惟から生まれるであろう。アジア的アスペクトから、世界歴史の歩みと展望を模索し、アジアにおける考え方の相違を認識し合うことから、進めて共通性を求め合うことの努力の積み重ねを繰り返すことによって、世界を網羅する新しい共有しあえる構図を模索してみようではないか。その意味でも、中国と日本における思惟の差異を探究する国際討論会は、世界の新しい構図作りのスタートになる筈である。

この度、日本のシンクタンクの指導者の方々台湾にお招きして、日本有識者の考え方と切磋琢磨の機会を得ることができた。ここに改めて感謝の意を表したい。

一九九三年一二月

国立台湾大学日本綜合研究中心主任

許介鱗

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com